



夏型過敏性肺炎の研究を顧みて

安藤 正幸

表参道吉田病院

夏型過敏性肺炎の研究を顧みるとき、『夢に生きる』、『臨床は患者に学べ』、『継承的創業』などの言葉(座右銘)が甦ってくる。

1973年頃から、夏季に、居住環境に関連して起こる過敏性肺炎(SHP)の症例が西日本を中心に報告されるようになった。1978年、越智、宮川らは本症患者の血清中に抗 *C. neoformans* 抗体が高頻度に存在することを発見した。しかし、*C. neoformans* は過敏性肺炎の原因抗原の4条件を満たしていないことから、演者は真の抗原を探究することを『夢』みていた。演者らがSHP症例を初めて診たのは1982年で、2家庭4症例の患者が入院してきた。本症が発見されてから既に10年の歳月が経過していた。演者らは直ちにSHP抗原の4条件を満たす原因抗原の探索を開始した。大変幸運なことに2症例目の家屋調査で本症の原因抗原である *T. cutaneum* を発見し、本菌がSHP原因抗原の4条件の全てを満たすことを明らかにした。『偶然だと仰るかもしれませんが、観察(研究)の世界では幸運の女神は準備している者にしか微笑まない』という言葉通りのことが起こった。

そんなある日、一家4人が受診された。先に発見した *T. cutaneum* に抗体陽性ではあるが、そのIFA値は低値であり、抗原吸入試験も陰性であった。意外な結果であった。果たして演者らが提唱した *T. cutaneum* 説は正しかったのか?もしかして、本当の原因は別にあるのではないか?眠れない夜が続いた。ところが、この患者の家庭から分離した *T. cutaneum* には高い抗体価を示し、この菌から作成した抗原に対する吸入誘発試験は陽性を示した。つまり、*T. cutaneum* には異なった抗原性を持つ菌株が少なくとも二つあることが明らかになった。後に、これらの菌株は分子生物学的手法を用いた新分類により、其々 *T. asahii*、*T. mucoides* と同定され、今日に至っている。まさに『臨床は患者に学べ』の感を深くする出来事であった。

SHPの研究は、疫学から予防まで、多くの臨床医の協力はもとより、微生物学、生化学、免疫学、分子生物学分野の基礎医学者との共同研究により完成することが出来た。また、産学共同研究により、抗 *T. asahii* 抗体診断キットを開発し、保険診療収載検査法として世に出すことが出来た。『継承的創業』の成果と言えよう。